

今村夏子『星の子』

朝日新聞出版 本体一四〇〇円

この世界にはじめからあるもの



今村夏子の出

だしにはいつも騙される。やわらかく素朴な語り口。素直で可憐な主人公。甘さと切な

さの混じるストーリー。きつと静かな日常風景を描いた、静かな小説になるのだ。だって『星の子』なんて、そうなるほかないタイトルではないか。しかし、読んでみると「む」と思

う。何だか不協和音がまじってくる。どこか不穏だ。これはいったい何なのだろう。『星の子』の主人公林ちひろは、生まれたときから身体が弱く、とりわけ幼児期の湿疹はひどかった。両親は一生懸命看病し、いろいろな療法をためす。その甲斐もあつて何とか症状は改善。母親はそんな我が子の成長の記録を克明に日記につける。

ここまでは、まあ、わかる。しかし、問題はその先である。

母の日記は途中から手抜きになる。ちひろが小学生になるころには、記録されるのは「食べたものと体温とうんちの状態」だけ。最後

は日記そのものがつけられなくなった。ところが中学三年生になった娘は、半分以上が白紙のその日記帳を「もったいない」として社会科のノートに転用する。ノートには昔の日記の記述が残ったまま。それを見つけた級友が「うんちの色、だつて。ぎゃはは」と声をあげたりする。

するすると半づる式のように話を進め、脱線なのか本線なのかわからない素っ惚けた挿話を挟んでびっくりさせるやり口は今村夏子ならではの。しかも、こんな挿話の周囲に、あやしげな新興宗教の話題がしつかり紛れこませてある。私たちは「あれ？」と思う。何だか変だ。

幼い主人公の湿疹を治したのは「水」だ

阿部公彦

つたらしい。少なくとも林家の人々はそう信じた。きっかけは父の同僚の「水が悪いのです」という言葉だ。両親はこの言葉を真に受け、薬にもすがらないで「金星のめぐみ」なる「水」を購入して娘の身体を洗ってみた。すると、あら不思議。湿疹が治ってしまった。効くのは湿疹だけではない。「免疫力向上、美肌、高血圧、低血圧、虫刺され、右脳の活性化、虚弱体質……」。そして水以外にもさまざまな商品がカタログには載っている……。

これあやしいよね？ と誰もが思う。典型的なインチキ商法ではないか。果たして背後には、いかがわしい新興宗教の影が浮かぶ。

そうか。宗教の話か、と思う。しかし、そうではないのだ。『星の子』という小説のほんとうの持ち味は、見るからにあやしいこの新興宗教が、いつまでたっても「真

のテーマ」としては浮上してこないことにある。真正面からは見据えられない。あくまで垣間見られるだけである。視界の中にはずつとあつて、終始目に入るのだが、対象にはならない。それは「図」ではなく、「地」なのである。はじめからそこにある。そんなものを人はいちいち正視しない。

『星の子』の世界はあくまで、ちひろの目とおして見えている。そこには、昔観た映画に出てきた役者の記憶や、その役者と

たいして似てないのに似てるかのように錯覚されている学校の先生や、同級生のカッブルの切実な仲間が抜けているのかわからない行き違いなどの描写があふれている。宗教団体の行事やメンバーをめぐる出来事も、ちひろの目にはちょっとした冒険として映るだけだ。

もちろん、読者である私たちにはわかる。起きてるのはたいへんなことなのだ。ちひろの叔父にあたる雄三は妹夫婦を宗教団体から救いだそうと必死である。二人の目を覚ますために雄三は「金星のめぐみ」をぜんぶ水道水と入れ替えるなどという作戦も敢行する。「雄三おじさんお水入

れかえ事件」である。この一件には姉のまーちゃんも参画した。しかし、作戦は失敗に終わり、まーちゃんはついに嫌気がさして家出してしまふ。

たいへんなことである。おそらく日本のどこかでかつて起きたような、そして今でも起きているだろうアクチアルな問題がここには描かれている。社会の暗部！心の闇！いかにも新興宗教を扱う小説が

ざしそうな看板だ。しかし、『星の子』の著者はあくまでちひろを通して語る。ちひろ色に脚色された世界は、社会の暗部とか心の闇といったセンセーショナルなフラグは立てない。ちひろにとっては、この団体に支配された日常こそが「地」なのだ。何か変だとは思っても、それは似顔絵を描かれて怒る先生や、急にキスしてくる男子と同じ地平にある。そして、私たちにとって不穏なのは、まさにそこなのだ。

『星の子』は読者を騙す、と最初に言ったが、これはいづれ種明かしがあるというような話ではない。最後までこの作品には静かな情景があふれている。家族で流れ星に目をこらすおしあいの場面など、ほんとう

に感動的なほど穏やかだ。たしかに静かな小説として『星の子』は終わる。

しかし、この静けさには限りない不穏さがこめられている。ちひろの等身大の視線で語られる世界が愛すべき穏やかさややさしい笑いで満たされていればいるほど、何だかヒヤッとする。不穏さを通り越して、それは人間の究極の「さびしさ」のようなものを示唆する。

『こちらあみ子』と同じくこの小説でも、絶妙のスタンスをとる影の語り手がいる。ちょうど『こちらあみ子』で、語り手があみ子のふりをしながらこっそり裏切っていたように、『星の子』でも誰かがこっそり大事な情報を伝えてくれる。でも、あみ子やちひろもけっこう遅い。そんな語り手に一杯食わせる。そのたびにこちらは「むふふ」と思う。登場人物が語り手に一泡吹かせるのだから、上から目線のいわゆる間接話法とは反対の「逆間接話法」のようなものか。とにかくちひろの話を聞いてやろう、とこちらも思ってしまう。これこそ小説の快感。小説の勝ちである。